京都大学	博士（人間健康科学）	氏　名	早乙女　　智子
論文題目	Sexual　Dysfunction and Satisfaction　in Japanese couples During Pregnancy and Postpartum. （妊娠中と産後の日本人カップルの性機能障害と満足度）		

（論文内容の要旨）

＜はじめに＞妊娠中や産後は、特に女性の心身の変化により、性機能が低下することが知られている。その要因として考えうる分娩時の処置や身体症状などによる変化についての研究報告は多い。しかし性機能は、女性側の要因だけで評価すべきではなく、パートナーとの相互作用も考えられる。本研究では、妊娠と産後の女性に対して、性機能調査を行い、同時にパートナーの男性の性機能調査も行い、男女の関係性と性機能を調べた。

＜方法＞分析対象は、ある病院で出産したカップルのうち、551 組に調査を依頼し、質問紙が回収できた 127 組である。20 歳以上の日本語を母国語とする、合併症や妊娠中に入院歴のないカップルを対象とした。調査対象は妊娠初期、中期、および産後 1，3，6，12 か月で、横断調査を行い、それぞれ 15，26，21，22，21，22 組が回答した。

使用した調査票は、女性に対して女性性機能インデックス FSFI(Female Sexual Function Index)、男性に対しては勃起障害の評価スコア IIEF(International Index for Erectile Function)を用いた。FSFI は、性欲、興奮、潤滑、オーガズム、満足、痛みの 6 項目のサブカテゴリがあり、それぞれ係数をかけて総合点を算出する。IIEF は、勃起障害のスコアであり、ここでは産後のパートナーは、勃起障害の可能性があるという前提でこのスコアを使用した。勃起、オーガズム、性欲、挿入満足、総合満足の 5 つのサブカテゴリからなる。カップルの関係性については、家事分担や出産の立ち合いなどについて、それぞれ本研究用に作成した質問紙に回答してもらった。回収はカップルではなく個人単位で行った。

対象者の属性としては、平均年齢が女性 32.8±4.4 歳、男性 34.5±4.8 歳、初産婦 58 人、経産婦 69 人で、帝王切開は 20 例（23.3%）だった。

＜結果＞女性の性機能総合スコアの平均は、1 か月後 9.6±6.9 に対して 12 か月は 19.5±9.3、男性では 1 か月の総合スコアの平均が 30.1±19.7 に対して 12 か月では 45.4±21.8 と、男女とも産後 1 か月の性機能が低く、12 か月に向けて回復する傾向があったが、有意差は出なかった。女性では、産後の 86 人中 79 人（91.9%）の性機能総合スコアが 26.55 未満と性機能障害を示した。男性では勃起障害スコア 15 以下の 39 名の勃起障害群（45.3%）と 47 名の正常群（54.7%）に分かれた。この 2 群において、勃起やオーガズムなどのサブカテゴリには有意差があったが、性交満足度だけが差がなかった。また、ED 群の女性パートナーでは、正常群と比較して有意に性機能が低く、男性の性機能低下が女性の性機能低下に拍車をかけている可能性が示唆された。

関係性の指標では、回答者の多くは仲が良いと自認しており、回答者のバイアスが強く、関係性と性機能の分析はできなかった。分娩様式の差では、帝王切開群で、男性の性機能が経腟分娩に比べて低かった以外は、授乳や親密さ、男性の家事の程度などとは関連付けられず先行研究とは異なる結果となった。調査バイアスによる集団の偏りと、症例数の少なさによる調査限界と考えられた。

＜考察＞妊娠中や産後は、女性の心身の変化により性機能が変化することはよく知られているが、本研究でも性機能の変化が見られた。性機能そのものと満足度は必ずしも一致せず、特に男性の満足度は性機能と乖離することが示唆された。一般的に、産後は心身の変化が激しい時期であり、女性の性機能が男性に影響を及ぼすことは想像に難くないが、今回の結果は男性性機能が女性に影響していることから、妊娠中からお互いの性機能について話し合っておくことが重要であり、産後のセックスレス予防のためにも妊娠中からの介入が必要と思われた。研究の限界としては、横断調査であること、分析に必要なケースが集まらなかったことが挙げられる。妊娠・出産で性機能を損ねたり、性の健康が保てないようなことが起こらないように、今後の研究に繋げて行く予定である。

（論文審査の結果の要旨）

妊娠中や産後は、特に女性の心身の変化により、性機能が低下することが知られている。性機能は、女性側の要因だけで評価すべきではなく、パートナーとの相互作用も考えられるため、本研究では、妊娠と産後の女性に対して、性機能調査を行い、同時にパートナーの男性の性機能調査も行い、男女の関係性と性機能を調べた。その結果、産後、性機能の低下が認められたが、性機能そのものと満足度は必ずしも一致せず、特に男性の満足度は性機能と乖離していた。また、女性の性機能が男性に影響するのみならず、男性性機能が女性に影響していることが新たに示された。

以上の研究は産後の男女の性機能の変化を明らかにし、その変化が男女の関係性に起因することを明らかにした点で新規性がある。この結果は、健全な夫婦生活の構築に寄与するところが多い。したがって、本論文は博士（人間健康科学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成３１年１月３１日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日　以降